阿蘭陀之部

特別
ル8
2970
2

阿蘭陀ものがたり

下

紅毛渡唐の下

右これ織ものの中華ちりゑる
ものゝ同さとの名ゝ○繒○紗
綾○綺子○大諸紙○縮緬○紙子
○七條○ゑつう○諸帋子○又條○ゐる
○もんけん○ちやう○ご八○羅○紙
○紡○紅毛錦○紅毛合入○金巾もん

ル 7
ル 8
2970
2

○さゝさ○合さゝさ○ちやむろそう○
紅花油　○さんとうの油○せいらすぢな
○かびあんあり○樊石榴花○白絲○
麻布○皮るい　○ぜい皮○いんぢん
○ちやもや草○とうが○さんとうの○
いぶがし○紙皮　[illegible]
○菜種　[illegible]
おうんぢ藤治しやう　西方日おうぢ

ちぢび古方よりのものなれども用ゆる
ありしむかしより年々今日まい
まるすぢいあく病乳よりうえ
用ゆるとあり新方もし古方より
ずもまされば古方をすて新方
をとるべしすべてさまざまの
ものを時々の効驗の写方と用ゆ
るべしよく他のごとく拵まる

方ありしまうとこを茎も他毒とハ
用ひやすく是ゝ他毒ハ草根
樹皮を蝕ぬ袋よ入れ湯よ入せんじ
用ひ初ゝ人ごとハ第ゝ毒を強き
と薬を術灌よ久くむしりつげふと
ふ〳〵すこふ乃家のもの
よ駅へ初さこを病氣ゝを出てけこ病
に八術〳〵の方用るとし毒の中へ

波れ初さ人毒ある家のと術種ましも方
よまを入と搔まぜ病ちふたつよ
とあり和秘もまゝ〳〵ちたり
他毒ハ脾初ぢとませく
を好食ぬ紫とつたく肉とつげ
さするあと おらんざ〳〵ハ脾初ぢ
きちと毒氣のあるぶんと丹初
ゝし薬を病と金病とふして

癡治きるなり此郷地方より一志
よしとぞ
○こいら　昔より番人のこともぞうり
おけもの西天竺京のびきげん
やとりふ国ありしを迎大悲閣まし
こしかり夜の涼み沙石もやけく
大のごとくおるあへよ屁やくすのでも
孫ましこしらへ為る轂まのりこと

なかうもしろげりし轆轤をまるさたる
を渋柿すきるかけ心よかいろを大風れ
こまる廣くのりもしこを風よなひ
ぬりまたバ車をらけかべすこしとわりあるま
つて欲あまる人のはひ渡よりより落蟹を
バ然ち鳥をとけるのよおるまでこ流らう
まゆるもの孫の熊手をとまりて飛鉾を
あるる人軀をとれうるとなり又一艘する

ゝ出れば死魂ふ拵り毎るまの七曜脇
とゝ名きひ〳〵ゝ法系と脇円ゝつゝ地
中へ埋置〳〵こゝいらとなをもとゝいて又
一説ゝハいろくの熟とゝ乳者
松脇ゝ炮合せ作り毎るものゝもふ
紙毛人ゝさごうゝまゝ〳〵ゝ毛れば
いやゝ流まゝいろくの流ゝ
番人もかゝゝる流とゝ及びぬゝバ

ゝや元禄ゝ拵ゝ打毎るゝいらゝ金
神人ゝ乃ふ美形ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝし打毎ゝうゝゝゝゝゝゝゝ
んゝ先ハ陶家ゝ様ゝ輕耕深ゝ載毎る者
天竺國ゝひゝゝのゝ祭ゝ法人の毎
めふ家ゝとゝ〳〵く茅とせんゝて
ゝ食ゝゝゝ作ゝゝゝ窯とゝゝ流
ゝ死ゝゝ反と櫃ゝのゝゝも窯

ゑしつめ藍の〳〵ふ年月日時を書
百年〳〵と経〳〵たるほどべーとそ年よ
切〳〵る毛髪の子時ふいとりく丸ー
第一病〳〵毒ふ腐〳〵しいとるふ
〳〵どこれを本乃俗ともいまく蜜人
ともいふてどこもの沢ようそ人瓶
のこいらを洗ものなく人像の動血
ふ洗番乳番ふと嬉〳〵合〳〵いらハ

本草綱目ふ所載の質平〳〵るべー
〳〵ふ〳〵たる風毒ふ効能張病
たるのはよ吉○男の中ハ外ふ用ゆれ
バ悪〳〵て男つくるる○婦病ふ○蔵
ふ酒ひし醗ほどの薬丸ふ○新産
ふ○血とめふ粉ふて用○腸つく病
ふ〳〵○吐血下血ふ○疱瘡出かる
ふ○腰〳〵むるふ○膀胱ふ○胸痛ふ

○霍乱ニハ○ナツメ
酒ニテスリツケ頭ヘフクベシ
又ハ酒ニテ○癍毒ノ
内ヘ鍼ヲ入ルノヲ○乳ツケヲ○ヒヤ
クヲ酒ニテ○軍中ニ
ナリ穴アヽヲ白蜜
ナリ加ヘ穴ヘヌリ○小便通セヌヲ
○男女無子ニ
湯ナシ三ヶ分ツヽ用○片脇痛
生ニ加ヘ用○乳癰乳ツケ

血多ク出ル時血止乳ヲ
ヒヤスヽ○酒ヲ辞ヒヤヲ○食傷ヲ
酒ヲ湯ニシテ用○毒虫蠱ヲ
ヲ称シテ蹄涕ニシ分○分ノ内ヲ
血多キヲ○分ノ内ヲ風ヲ
ヲ○大熱乳ヲ○刺痛ヲ○
痰ヲ○積ヲ酒ニシ○懐人乳ヲ
ヲフクベ鼻ヘ○ヒケヲ

ふるし胡麻油○疫よりづ○癩
癩よ○三百よりあり用元大人ま二
三分ぐ但飲汁は酒酒のまし用小
豆よりは方ほどづ燃焼は酒ろ砂
糖ふしまよう一行ともせあよまを合
かし

○うんかるる石ぢ行こ一の紙袋
とうんとふ角の紙の紙ぢ酒とかるる

のとふぐさを略てうんかるト唱ふ
三鼎屋のおすし一角にのり屋角中
のよろ和ちるこのあると通天屋ちど
いるるいなうんかるる系小載る石の咒
これあり山ものまりも毒を解し
番人の拍ぐうに沙漠のを石ま川
なのうちろまを毒のうのうぐふ
うんかるるまを角をとふ入

ちつぎ〳〵かさねてのちちとのむ
とふくれとんくとれり茶熱も陶
て水とのむ角れかくちち熱をのく
きこ二ヌくりハ九ヌ中ぐこのり角乃
脂稼熱ヨ似く茅褐色刺ハちぐ
ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ゐりゐ角の中ヨすあり
渥とりハく換ホこ去かぐ潔白
ホーて微渦又あり多くハたきさ

こと効能越じて毒解ヨよ〳〵○
合〳〵つとヨ○ヌヨ渥〳〵ヌホ○疱疔
こと風ヨ疔こと脾ヨ出生熱ヨ疔
ヌ〳〵〳〵ヌ成ヨ邪こしすり身○大
熱氣ヨ○疹ヌホ○傷痍ヨ○茅脾
抱ヨハ引てヨ〳〵○毒虫蟹ヌヨヌ
身○亀血ヨ血ヨホ○膈ヨホ○霍乱
ヨ○氣つれ〳〵れヌりのホいけハ死のヌ

すつと云てくゝ用○虎骨不仙茎根
ゑくと蔵経一勝わどゝ彩よりぜ用
○傷寒よ一日よこゝ五ほど用○河豚
こゝはう毒魚にて醉こゝる不○鹿肉の
熱の氣さめ難こゝる時用○魚一こゝさ蕨
出来多ゝか仕○妊娠こゝる用ひど○
酒の醉不こゝ用こゝて用古紙の石
けいゝみも堅こゝ〆を付すり用

他一こゝ分ほどづゝ用この薬こゝも拵合
かし
○びつゝ 濃石玉面方光蔓援藍
也こゝこゝとゝ中ゝり出る薬好分り
魚の血と拵ゝりかゝめぐゝるものとゝ不生
一毒解ゝり○今伝傷不○ましい出冷こゝる
に云ゝ中しゝこゝ生る○痢病不○出ゝ
ぶゝる○蛇に出こゝる仕一穴ゝ云こゝる安

おなじ物なれども右の菜葉なるハ青き緑
なれども二ようにつゝ用ひ一度ハ
ゆでゝ用ひなど
○すてんちいまれいふ大生姜なるもの
と国ゝにつゝとしていつるたちのあり実用
ひらぐれけすゝ西方より多く流来る
魚ありり日本の鰭魚おなじよ似ゝ石色
ありて黄ありり色とうゝ

流血ゝるゝ志賀を補といふ
○まゝゝや あんでいかとゝ流ゝ
出る合菜ありり和信ゝんゞ底物
といつる菜色ありりもつたり底法
有ゝ月四人くハずゝとゝとゝ
○せいくる 海るの味ありといふ
流毒けしゝ月
○さくちいりゝと 漢名 塩菜

法螺法螺貝はよろしくさけるを
近江和邦より出る平賀氏信州より
神くに出せり上総山辺大豆谷村より出
○すらんがをてんん　番人のいたく山の
蛇のかしらふせる石のうしろふたを形
奏ふんぜ〳〵こまをしろさもあり
もあるまつ上石相間もあり拾ふ
志ぜんのくちもとぜ大きなるを

とらは山形ふ拾ふものとぞ〳〵
ふく腔拍の膿と呼ふを吸ふを
をふ中へいるまバまこを膿をと
くを吐出せくとをあげて戦爰
も用るを法和方まで宝より出る
法角とこのあるふこしらへ用る
よすらんがをてんよ効能相かゝら
ぞといつて蟹の法のことをいるも法角

ようもこしらへかたハ番人の中伝
は濃くしてもかのうや或人曰湖濃
くしてもけものとれるといつて
○へいさくだるる　羊のごくあつ熱
の腸中よりせどるるゑかアヤ二毒解
ちり○癰疽よりも但さ時分と温
泄とかくさよし○腹冷痛り
○蕎麦よ○胸づいよりたい一灸

よ去分ほどづゝ用又氣力つゝさんよハ
二ふ程づゝ但し細ふすり碎く
飲汁ハ酒もも湯ものもよし
○こんにゃく　和俗海やしやくの輕
耕漁よ出る火矢刺さるり小児の赤腹
よりもしすり脚の毒ふ付く○淋
病よハ灯心十筋せんじて毒付て用
○おむろりふ　合茶ちる散茶ちり

ゑのしかすびをもつて
米ぬかの油をもつてさけるを毒にて
さ疱をもつてはらびしてさけるを
ものゝ中ハ菓子人もこれを方とせく
てゑ四五石散とゝなづく何器が服せ
五石散ハ同名異方なり
○ところんべつて 呼吉のるゝ骨茎を用
○へいしむれる 人魚の骨なりとも清水にて

けすの傷多しまつと試るよ女人の髪を
りしく毒を火中へ投ずてやく髪
焼けざるとまつゝん疱瘡の治効
疱よ毒と用
○るざゝし ところるとゝ用るよ毒なり
血氣及び法病よ用
○もぶてこぬ 茅ごくけしなり茅
蕾れざるものなり毒蛇とも

びゞ　和方ふたぶてこぶゝと称するもの二三種あり　桐の末代葉よりまゝ一種ハいぬあまでの葉まあつと効能同じ　先づくるる

○たぶてちんたん　右同しるしあり

○へいあるぼうと　柿の脳中よりなる茎ゝあり

○おくてかんたん　あまくまきびの脳ふ

生る石ゝとゝ　ふ玉形　酸鹹よ似く

ちいさくゝ　潮　白ゝあり　法林病よ

あゝ　ぬかなる

○けいしがとる　牛の乳を絞りあ

るものあり　紅もゝ人法合酒よりて

〈合日本の縮緬命と用ふべし

はりの九葉ゝ　衣よ油類とけ

小児の百日咳ゝ　効あり

○海人草　海の中にありて人の
切傷にぬりぐすりにつけて血を止む
○らあさりはまぐりの類を蝦夷地
にてもとるやうにかるものなり小蛤にて
御もてなしにも菜にもしてもよし
もちゐ文彦の異説に出るかぶ
紙ふうもくのべ、ちゝへにかすかす
ぐしにさハ、下れおしうるだろう

そぎまりぬりたるとゝふなり。るとゝの風
雅なり
○すぢんす　是ハ菜用にハ用ゐざれ
ども紅毛和蘭にある腔物の膿血
をぬぐふ物にもちゐるものなり　和邦にて海
綿と云ふ紀州根来の海中に生ず
る形ちくさありてすこし綿に似た
ちくこまうふ穴あり海にのこり

海佐うちうちうちうち日和うちうち
黒雲海より出ぬ
○ろうずちんをかう　ちゃうの海
ちてよせる美ありと出る婦人産ふ
ちむ時ちうちの薬をとろふ渡すとき
八産ちんとるつするすこーまんふち
ちくちまちまちゆうちゆうと儀とすまと
那産およ薬産するも可ありとぞ

○かりぷまとへう　新まんん　今ハふうんちう
いつちうとちうふ和佐第根第阿蒙第紀
ちちうちちちうふ先ちあ里産ちあ佐法福よ
薬腸して効ちのうやけどよハけちまん
やちふしてぞるとやるの油ちし付る
○ちふらん　紅毛より伝ちうちうちう
法無福ちりちう用ひ他邦ちう人
天ちと用ちる福福よちを用ひ

○てぞうこん　葉あり圓長色
赤ちゃかし香氣なり
○あめんどうと　桃の實ごとくなる
ものあり漢名巴旦杏といふ
けものの油なり和してよく疳せきを
治すどんあんもといるも同物
○るうどうあでのちふよりくすの角
ふあうさ缺刻なり毒臭なり

○ろんるうど　うれもるうどふ似くなり
くちうなり　ちふるうどうとまうり
色もちあるつみよし番人色をあむ
るうどうと
○うしてるうど　和名山椒まことに
おひちふのうちち山椒ちうど似うり効能
なふ同じ

○てうあぐや　かぞく所載の底野
迦ゆうるとあし　姉妹ゆう和名抄
鹿の起爲せぐるまた婦人撫腹
あり

○ちやあるて　ゆ〳〵しくして小ゑ作ふ
似ゆうるとあし　ゆうて光ゆう又樂
けゆる琉球のごく光あり稲氏云
能毛拔才脂を酒もし養ゆるとゆう

○ちりめんていこ　檜の木は香ゆう
味苦し或人云檜の木は苦を養ゆ
ゆゆる油ゆうと
○魚くうずく　蝦蛇の皮やくゆう
○こつまんう　草根ゆう和名抄蓮よ
似ゆう味苦し一味糊九〻小四雲底
ふゆる
○油菓子　○ゆのせうか　○ちるゆめ

○あぶらぎ　○ごまの油　○椰子油
○えごまとかるの油　けし油は一種のものとぞ
古説に今海ちゝは臭あるやうふんの
今海ちゝはほとゞぎすとせんだうふ鴨の肉
ちゝとうるすけうるとどんまゞバ合ものあり
べし
○酒の部六　○葡萄酒　○肉桂酒
○竹葉いとぐらんどらん　○ちんくらん

けふいらく竹のう
○こゝんざろ　漢名胡蓼　和名こゝ
といふまた悪臭あり　番人つねふ合科
とす魚鱗のあはとけりのもしぶぶと
いろく
○せうぞ　せうのあるけがわらん
ぶるおゝんぶちさふあり
○大甘草　和俗紅草甘草とふけ

ゆへらあさ大きなりといへども中華には
甘草あり性わろしといふ此国ろ
茶種は野菜多く浄すといへども華船
茶はおく船より来るものと同じからず
されどもくろふ田畝を
○まい川さすていん　毛質やまらるる
石のあらうちと異なるものに似る漆の
毒を消すのちくとこひはいちぜんと

底まであつくもとられ食料となり
和邦にても伊豆の植ふ名主判の浅陽にに
薩州は岩つきに探あり
○らいざ　瀬名瀑泉花といふぞく
此探ありちまかまろし八重ふして杜
丹ほぞとれは甚し此花の霜をとりて
法眼和上用ゆ
○ぺいうふ　漢名交雑　和名や

ぶくみむくて番人はなはだとうめく膏
ぶくと腫るこたえをてれいざるとうの他
邦此系統亮有とりつぎ〳〵法病よ
もつたり〳〵用

○うんぎやべいいる　和俗紅毛石竹と
いつもいえ香をよく〳〵たるる和邦石竹
よう〳〵言るし〳〵花の家とうり面部
此腫物ゆする

○ばろん　此ふ時牛の車よ似る
とし和俗時牛ゑまと名づく効能いそど
つまびら〳〵ぶず
○ぴいるりぴん　此ものえ
中ふ生ぜ生うち蔓ふ似く大さく
葉効あり〳〵こびとどもいろ〳〵美酒よつ
くると民用ふ利あり
○ぐらいんすていん　和俗金瓜

とりハ七ぢ質ありて鼎に似て二寸ばかり黄
金のかざりあり葉東ふいのくずといへども
みな用よ似たり二三飛あり二寸ほど
○金○銀○あかゞね○鉄○鉛○錫
○ま銀
◎寶石の類○珊瑚○琥珀○水晶
○空青○い花紺青○緑青二色あ
數多なりといへども煙硝多くあるべし

太撮とよぶに記す此外畜類鳥類
いろ〳〵あり○獅んご猿○狸しんご
犬○麝香猫○野牛
◎道具類ハ持来る事大文字ハ
○渾天儀○遠眼鏡○五星儀○ぐハうろ
こんハ星を見る器なり○いすわるび
是ハ日早をもる器なり○こんばのす
是ハ他州のぶんまハしと同し○星暑

平家の二種あり○世界の畫 此も平
家の二種なり○かるもの畫 是ハ俗畫
うし船を世界へ出すとき書たる
みる具なり○丹後畫 是ハ三人斗
ある木の中をうつぬき中へ破子の筒と
いれを用へ入をおくこれも同時
一場より幕をまじ時ぶへんぜん
とせげる・を拉ふ二十四季の書 付

なりて是時候をもつる為なり○まん
ぢき ちやうりどある木の中ハ鉄の棒
と入を機関なりて車をまわせば
中の鉄の棒如く人力の及バざるおもさ
ものとなるこのぐるけかい科乃ゑ
く他州の屋ぐるる細工なり○らんびさ
是ハ流の業種の精巧と驚つげる
乃ゑなり華人ハ驚歎嘆と云を

○かいぷり小刀ちかく○けふつぶめり
ぬ小刀ハ又と鞘のうちふ入れつまと出
ぬとこハまやもとふもち柄とある
こと又玉流し○巻物 これハ珍を
ずいぶんうちくのべくるくまきと看食
いれ〳〵蓋とし猪牙せるやまもち
ものかう物とさ〳〵んと弱るとさハこと
蓋のとふちじさかりとれとちびす

とこハ中の級とび出くのもこうれた
とこかりとちの八代細工人寿ちよし
○碗器物ちの雅〳〵ひめどち細工ぬく
○びいどちかゝみ大小画柏ちく山焼
洞焼のゞ〳〵いりもで清ねと字寅
とす
○こざやきん 代石ち扁小仏〳〵ちか
さ〳〵ち品の衣章びいどち器拍ホ

ふ画板と彫るにはいろ〳〵で八彫こと
ばのとゝのぶせるを呂ーといへども人乳
と一夜つけ切〳〵とハかーやとゝうふ
ちゝ〳〵こゝ三角なるひハ八角ゑ凧帆
がーらふ鬱樹ゑんふきりちめ番
人ゑふ鑿ゑよもちあるく山川
世風京人目の切〳〵ゑとうゑと
ぬありといつと

○目ゞ○敷○かけ目ゞ○ゑ晶目ゞ
○磯ゑ目ゞ○縁目ゞ○うのゑ
○千里目遠○遅目ゞ○鬱目ゞ
○磯目ゞ○大とり目ゞ○ゑと目ゞ
○敷目ゞ○出目ゞ○と年出目ゞ
ふゝ志ゑ蕪と拾ちあきりけゝ蜘蛛
のゑのゝとえんけゝふ二三蕪の出人のひ
ゞ目とゝうゝうきゝ人髪とゑれ

えけるふふ〜さ毋揺りとみえ世人
贅さつゆふハぶ帥ア人ぞるゞ先ゝえ
ゝバ竹のふ一のとくこ海ふふ一
あるとお年ゝ世ゝ合きく老人
の贅ハさ医ほどで手一つまちあけく
ア人多る奇美ある細工ふり○ちなてぬ
ぐひ　これハうすすきさぬとみえそよ薬
杜毋亀さほういろくのふとたゞよ

ふせ作りあるものふり今ゝ華人より風
流の業ふ考〜更ひく繻紹と名づく
○めりやすと　ふ代貸所ぶくろをの家ふ
却りあるものふりむ奉ふハ却牙かく
るやうふもちるなり
○西れさゝうせいゝ　先ハ活痛
のあるゝ病人の痛ふりたをうる品ふり
せゝとゝゝうゝハ此方をを工まして成

然しかるときこの人はちと今ハ法華
はなしの人はちと方中ゆうちとゆうゆ
あやしきさま似たりとゆうゆ
大はこつゆし訶梨勒ハ人ちゆ
理ありきゆうもこのうるべしすでに
天竺の釈迦佛ハ沙羅雙樹の下に
入滅ゆうしかの方中ゆうちと茂しかの
中あとゆうゆ棲舎利とゆうしゆうれ

法人のちるおよりもこと仏法ゆうも不動
明王ゆうどいうゆうく恵方より大福と茂する
かど画ゆうすゆうしもゆうるゆうしくやたの
理とゆうゆ佛法ゆうゆうゆうゆうゆ
あるゆうまゆう中華ゆう書ゆう南蛮大
とゆうくの戯ゆうゆうゆ仙ゆうゆうゆ
又至仙ゆうゆうゆと思ゆうゆ出せしゆ道士も
うれゆうゆうゆうゆハ天域の時ちゆうくハ

文治のころ京義兵衛の乃ぬさ
ふきくの所なる毒と風雨ふ
太まりて脳の所ちと今ちるとくあ
やしみうけるる為ち大りえ出く想
ものとうかやうつせとありかうふ
奇異なるもの、京極宝塔の日記
うつくしう今も又婦人顔色
驚くと慄るしく大の出るものあり是

ホうり蕃人ぬ工夫して作り出をるもの
ありうん平人の目うるま怪るもとぐる
数万の人ぬ生驚るうりかふ形も
るるや怪乃毒めちぐくうふ
ちくを

高さ三寸ばかりていの器

此器横巾八寸幅八寸高さ三寸
五六寸内よ東二方ばかり和のうふ

筒にてこしをうつ 灸治

すこしよりぐるとこの病人

まのあたりにて療治する人は車をまきたてゝ

ちからなく車をまきたてゝ

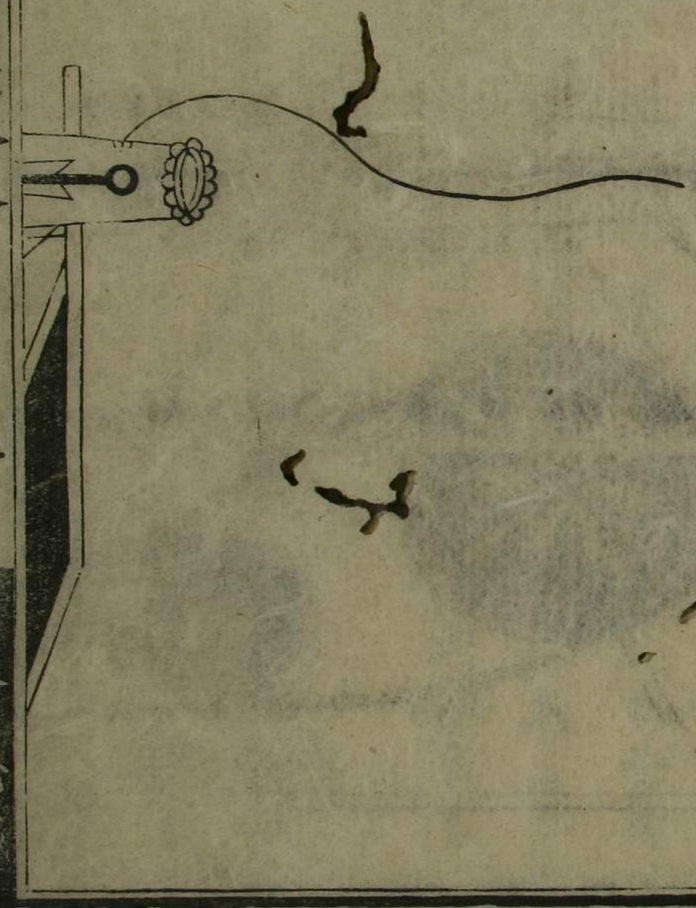
もちゐる灸治の人病人

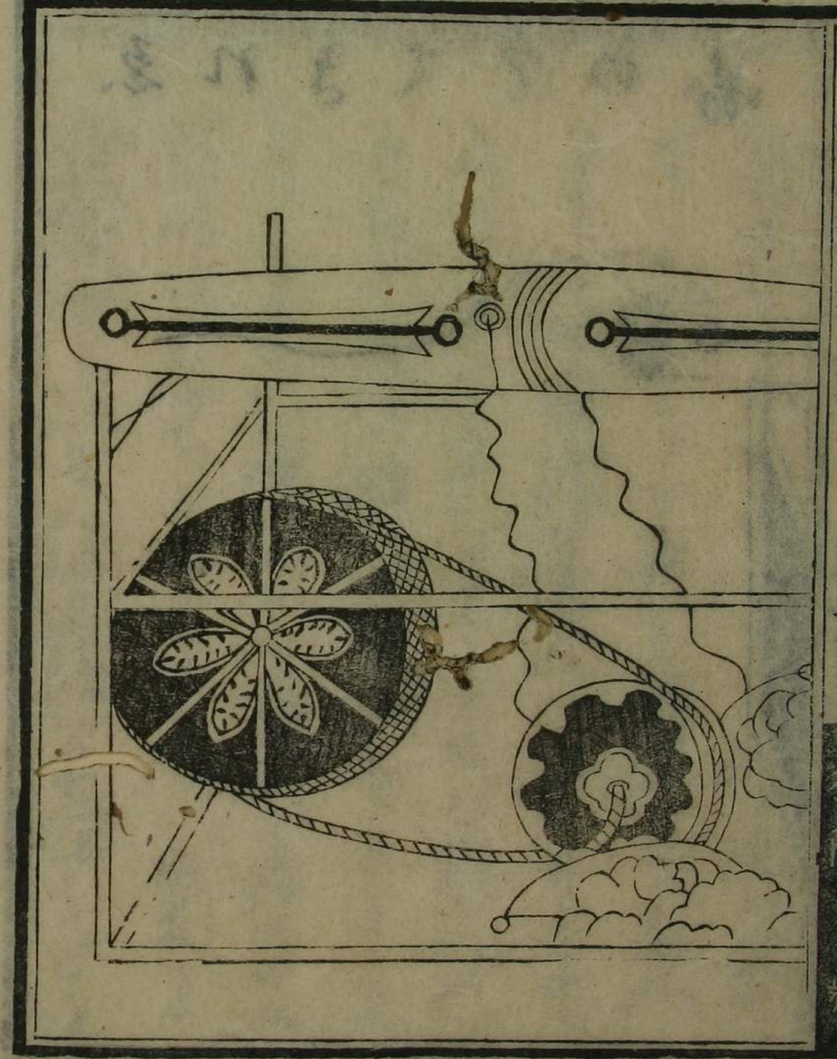
こしをさして療治の人病人を指のさん

にてつけば忽ち大出るとかゝり 灸

鍼灸共といつる人は療治と

忍れきてゝの筒





○時代ふるく拙げいの作
業なれども。根有げいなるひ、三年
もつて変ぜざるける自然の理もあり
さるかるべけいのかげいの制も
他州ハ三年ならず
○ふるふる　此器ハ銅にて喇叭の
のごとき物にて　俗にあるものこれなり
あて言ときハ二里先へとくきこゆる

とゝぐ人ハ事多くは細工人あり
○五臓の器○ぐゝ毒をとる
中華よりいつるものと
同じ山画の割工ものゝ彼国
北醫人のもちまる商毒ものゝあらゝび

紅毛渡卷の下大尾

絵詞卷之下

梨春先生編輯書目

合鑒本艸　梧陰菴
隨観寫真　三十卷
本艸綱目會讀筌　三十卷
本草綱目補物品目錄　十二卷
同後編　二卷
都老子　三卷
龍宮船　四卷
　　四卷

GANSHODO·SHOTEN
KANDA TOKYO
東京神田
巖松堂書店

採藥便記　二巻
紅毛談　二巻
春秋七草　一巻
甘蔗記　一巻
尺八志　一巻
大便經　一巻
河豚禪　一巻
志のぶゝま　一巻

落丁請合
古今書籍所
巖松堂書店
東京神田